

第1分科会 個に応じた指導の充実(特別支援学級の取組)

テーマ「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

提案1 「国語科『世界でいちばんやかましい音』の実践を通して」

発表者	岡山県 岡山市立芳泉小学校	教諭	各務 桂子
司会者	岡山県 岡山市立芳泉小学校	教諭	小野 成美
助言者	広島県教育委員会 特別支援教育課	指導主事	山根智香子

I 実践に当たって

1 指導上の立場

(1) 教材観

本教材は、山場の出来事を通して、中心人物が変容する様子がとても分かりやすい作品である。物語の入り口と出口にある「立札」の言葉によって町の変容もとらえやすく、この二つの変容の関係を読むことで物語の構成をとらえやすくなっている。物語の終盤で「町の人々が平和になったことを自慢する」描写が出てくるが、変容前も戦争をするなど、争いごとがあったわけではない。そこで、変容後の「平和」とは何かを考えさせることで、自己中心的だった全ての登場人物が他者への思いやりをもつようになったことを読み取らせていきたい。

(2) 児童観

本単元では、自閉症・情緒障がい特別支援学級の第5学年4名が学習を行う。全員、学習の中で特に国語科を苦手としており、自分の考えをもったり、友達との対話を通して考えを深めたりする経験が少ない。勉強しようという意欲はあるが、「難しそうだ」と思うとそもそも机に向かわない可能性が高いため、いかに「みんなと一緒に読んでみたい」と思えるように作品と出合わせるかが大切であると考えます。

(3) 指導観

本単元では、「読みを交流すること」を中心として単元を構成した。第一次では本文の途中まで読み、続き話を考える活動を行う。その後、物語の最後の場面を読むことで作品の構成の面白さや予想外の変容に出合い、作者の表現の工夫をより読み深めたいと意欲をもつと考える。次に物語で一番変容したものを一文でまとめる。町の変容をとらえたか、王子の変容をとらえたかで、児童間に意識のズレが生まれ「王子が変わった話なのか、町が変わった話なのか」という読みのめあてをもたせたい。

2 必要感のある対話を生むための工夫

「対話をする」とそのものに課題があり、自分の読みにこだわりのある児童ではあるが、対話を通じて自分の考えを表出し、その考えが妥当であるか検討する必要がある。そのために「なぜそう思ったのか」「どの文から考えたのか」など根拠を示しながら自分の考えを話すことを徹底すること、またその文を読んで自分の思いを言葉で語らせる経験を積ませることを大切にしたい。

II 実践内容

1-1. 本文を途中まで読み、続き話を考える。「主」

㊦ 続き話を考えよう。 ※㊦・・・めあて

○ 誰も叫ばなかった。 (・は児童の考え、発言等)

- ・王子様は怒り、約束を守らなかった人々にお金を払わせて落ち着いた。
- ・王子様は怒り、世界中で戦争になった。
- ・王様と王子様が怒った。その声の世界で一番やかましかった。その声で大戦争になった。

○ 「わーっ」って叫んだ。

- ・王子様は喜んだ。叫ばなかった人は追放されて、怖くなった人々は、二度と王子様に逆らわなかった。

1-2. 物語の最初と最後の変容を一文で表現する。

「主」「思」

㊦ 感想を一文で書こう。

○ 世界一やかましい【町】が()を通して()した話。

- ・みんなが黙ったことで、静かになった話。
- ・叫ばないことを言いふらしたことで、叫ばない町になった話。
- ・王子様の誕生日に自然の音を聞いたことで、町の人々が静かになった話。

○ 世界一やかましい【王子様】が()を通して()した話。

- ・「叫び声」でないお祝いを通して、自然の音が大好きになった話。
- ・お誕生日にアヒルの声や自然の音を聞いたことで、自然の音が好きになった話。

2-1. 中心人物が変容した原因を考える。

「対」「深」

㊦ 王子様が変化したのはどうしてだろう。

- ・お誕生日に、生まれて初めて自然の音を聞いてきれいだなって思ったから。
- ・世界で一番やかましい音を聞いたかったのに聞けなくて、小鳥の音がきれいだったから。
- ・落ち着きを知ったから。
- ・大きな音しか聞いたことがなかったのに、水が流れる音があるって気付いたから。

2-2. 町の様子の変容した原因を考える。(本時)

「対」「深」

教師の支援・留意点	児童の反応 T:教師 C:子供
○ 前時でまとめた王子の変容を確認する。	T「王子はどんな風が変わった？」 C「最初はどんがらがっしょんって音を出していたけど、最後は静けさや落ち着きが分かるようになった」 T「きっかけは？」 C「誕生日に叫び声を聞くはずだったのに、自然の音を聞いたから」
○ 「変わったのは王子だけか」と問うことで、本時のめあて	T「変わったのは王子だけだった？」 C「違う。町も変わった」

「主」・・・物語の叙述をもとに、物語の最後がどのようになるのか考え書くことができる。

「思」・・・変容の前後で他者に対する思いやりをもったことに気づくことができる。

「対」・・・物語の叙述をもとに、町が変容した原因を考え交流することができる。

「深」・・・物語の叙述をもとに、中心人物の変容を読み取ることができる。

をもつことができるようにする。

○ 本文に行番号をふったり、本文の拡大コピーを黒板に掲示したりしておくことで、友達が本文のどこを根拠に意見を述べているかすぐに見付けることができるようにする。

○ 『人々は一番静かで平和だということを自まんする』ようになっているが、もともとは平和ではなかったのかな」と問うことで、平和について考え、変容後、人々が他者への思いやりをもつようになったことに気付くことができるようにする。

㊦ 町の様子はどのように変わったのだろう。

T「最初どんな町だった」

C「世界で一番やかましい町だった」

C「とびらをボタンとけっとばす町」

C「一番やかましい町の立札があった」

T「最後はどんな町になった」

C「立札が世界でいちばん静かな町、ようこそになってる」

C「世界で一番静かで平和だということを自慢するようになった」

T「一番静かで平和だということを自慢するようになったって言ったけど、もともとは平和じゃなかったの」

C「うーん、うるさいから平和じゃない」

T「そう、平和ってどういうこと」

C「人を傷つけないこと」

C「最初はドラム缶で大きい音を出して鼓膜が破れたかもしれない」

C「最悪死んだ人もいたかもしれない」

C「でも最後みんな静かになったから」

C「静かになったから平和になった」

T「じゃあ、静かでさえあれば平和なんだね。誰もしゃべらずに音も出さずに過ごせばすごく平和だね」

C「ん、なんか違うと思う。でも分からない」

C「違うかもしれないけど……。『別に悪気はなかったのですが』のところは自分勝手だと思う」

C「たしかに。その奥さんもだけど、王様も自分のために世界の人に頼んだから自分勝手」

C「そもそも王子様が一番自分勝手」

C「変わったことが分かった。平和って自分勝手とか自分のためにやってもらうとかを無くして、人のために何かすること」

C「それって思いやりってことじゃない」

C「今日のまとめが分かった。世界で一番静かな町ってことは、『世界で一番思いやりがある町』ってことを自慢していたんだと思う」

2-3. 世界でいちばん静かで平和な町の歌はどのような歌なのか考える。

「対」「深」

㊦ 世界でいちばん静かで平和な町ではどのような歌を歌っていたのだろう。

・静かだから歌わないかもしれない。でも鼻歌は歌ったかもしれない。

・歌ったとしたら、きれいな歌だと思う。

「とびらは しずかに しめましょう ゆかは とんとん 歩きます
昼間は おしゃべり 夜、低いびき さわさわ さわさわ」

2-4. 作品からのメッセージを受け取る。

「深」

㊦ 作者がみんなに伝えたいことは何だろう。

- ・落ち着いて生活すると幸せだよ。・大きな音を出さなくても、気持ちは伝わる。
- ・みんなと一緒に生活するためには思いやりが大事。
- ・自分勝手ばかりだと、人を傷つけることもある。思いやりをもってね。

Ⅲ 成果と今後の課題

成果・「友達と対話をしながら勉強をすることは好きか」というアンケートの結果は、単元の初めと終わりともに4人中4人が「はい」と答えている。毎回授業後の「友達と対話をして考えが変わったか」の振り返りにも、全員が「はい」と答えた。「最初は音が大きいのが好きな王子様の話で面白いなと思ったけど、思いやりが大事だよって話だったんだと分かった」と単元の終わりに感想を話した児童もいた。対話を中心に学習を進めることで、主題に迫ることができた。

課題・作品からのメッセージを受け取る学習では、「作者が～」というめあてで取り組んだため、難しいと感じた児童もいた。「この作品から受け取ったことは何か」と自分の考えを問うめあてにすると考えやすかった。

・深い学びに向かうために、「深い学びとは何か」を認知させる必要があった。

〈指導・助言〉

本実践は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、国語科の学習に苦手意識のある児童が「物語の続きを読みたい」「考えてみたい」と思えるような教材の提示の仕方や発問の工夫がされており、対話を生むための取組について提案されている。

教材の提示の工夫として、物語の前半だけを読ませ、話の続きを想像させている。隠された場面を想像させることは、児童に興味をもたせ、考えたいと思わせるものである。本実践では、自己選択、自己決定の場を設けてから、理由を考えさせたり、物語の続きについてイメージを広げさせたりして、対話へとつなげている。まさに、児童が「みんなと一緒に続きを読みたい」と思える作品との出会いがあり、みんなはどう考えたのか意欲的に聞いてみたくなるような教材の提示の工夫がなされている。

対話を促すための発問の工夫として、本単元では、物語全体を通して、【王子様】と【町】の変容について、物語の前半と後半の町の様子を比較させることで思考を促している。また、コミュニケーションをとることに課題のある児童の対話を促すため、中心人物の心が、何によって、どう変化したのかを一文で書かせ、自分の考えを明確にさせてから、友達に考えを伝えたり、友達の考えと自分の考えを比較させたりしている。対話を通して、次第に主題を受け止めることができるように工夫されており、児童の学びを深めることにつながっている。

今後は、深い学びの実現に向けて、振り返りの充実に取り組んでいただきたい。児童自身が、自分の思いや考えの変容や、身に付けた力について振り返り、次の時間や単元の新たな学びへとつなげていただきたい。